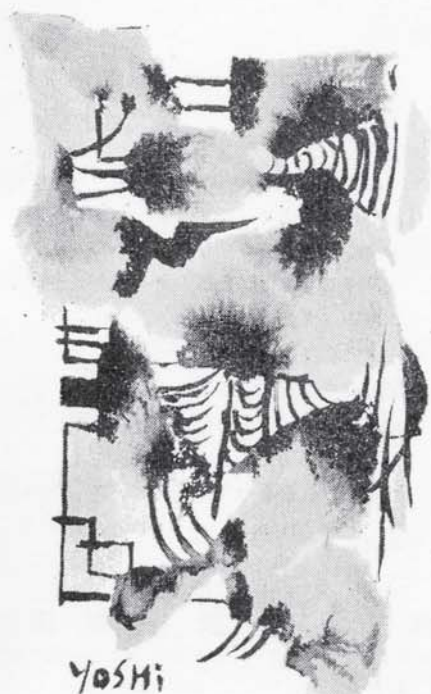


パリー・東京

田 辺 謙 輔



お馴染みのジャン・ギヤパンが着こんでいるような革のジャンパー、パリー仕込みのマフラーといったいでたちで、羽田飛行場に降りたつたのは、もう正月に間近かにせまった去年の12月だった。このマフラー、パリ市中のデパートやら、男物の小物屋などのぞきまわつて、苦勞研究の末、やつと意にかなつたものを買ひもとめたのであつた。帰国後これは常に愛用する所であつたが、驚くべし、全く同じ柄のものを三越に発見して嗟然としたのであつた。昨年5月から6月にかけてイタリーを旅行し、ヴェニスで開催中のビエンナーレ美術展を見学、さつそく記事を故国の新聞社に急送、さぞニュースブアリーノ満点と気負つていたら、ローマ大使館で日本の新聞をみるに及んで、これも先手をとられたらしい。

小生が記事を送つたのは開会2日後で、相当手まわしのよい筈、然るにこの記事はどう考えても開会前に送らねばその日附にはのらない勘定になるのだ。欧州と日本、飛行機でも北極まわりなら36時間で行く。その如く、凡ては「うん」と言へば「すん」と東京は反応するものらしい。春陽会の新人今関驚人が襷袢作を発表して受賞した。家内が送つてくれたある新聞の切抜きにはフォトニに似ていると言う。寡聞なる小生は学なき恥をしのんで、彼地での諸先輩にフォトニなる作家について質問し、気をつけて画商もさがしてみた。結局わからぬままに美術書専門の本屋に、その画家の画集をみつけたのであつた。ああ何と妙に東京・パリーは近い事であろうか。

帰国後、パリーぼけをしたのであろう。暫らくは、外出する気にもなれず、展覧会を見る気持にもなれずにいたが今春の毎日国際美術展を見る。

パリーでさんざんみたビニヨン、ビツフエ、クラヴェ、マツソン等になつかしく対面する。日本室の福沢一郎、岩崎鐸も欧州でお目にかかつたり、やつかいになつたりした人々である。然しこれも何と変貌した事であろうか。油絵具以外の素材、紙、布、ブリキ等を部厚くもりあげて、カンパスの糸をぬいて絵の向うにある壁をすかせてみせる手法は、向うでよくお目にかかつたやり方だ。闘牛、メキシコの絵やルネサンス風の日本画は見事抽象画に方向転換していた。

博・展覧会企画設計施工

六 書 堂

サツボロ北1西2 TEL (2) 2041 7870